

# 写真が芸術になるとき(1)

犬 伏 雅 一

## 1. 記号論への反省

我々の関心は写真そのもの、そして、写真が芸術になるという事態の解明にある。その際、写真記号論あるいは映像記号論が、問題として提起された事柄の解明に本質的に寄与しうるか否かについてまず考察する。今回は、この予備的考察の端緒として、記号論の可能性そのものを論及する。

### 1.1. 記号論は可能か？

例えば「映像記号論」というとき、通常理解では「映像」という対象があって、その解明にあたり「記号論」を適用するという構図が浮かびあがってくる。この場合、もしも「記号論」が映像に対してしか適用しえないものであれば、「映像記号論」という言い方は本質的にナンセンスである。それゆえ、「映像記号論」という言い方には、記号論がさまざまな対象について適用しうるという前提が元来含まれている。実際、何々記号論と銘打ったものが存在し、記号論の適用される領域は多岐に亘るとされているのである<sup>ii</sup>。

我々は記号論という営みの根底を検討するにあたって、様々な記号論的営為に本質的に所属するものを見極め、それを中心的に考察することによって記号論の可能性を吟味することができると思う。記号論が適用されると称する様々な領域を巡る言説に共通した身振りを、とりあえず一種の「記号の本質」と考えることにしよう。そうした挙措を概括的にまとめると、記号論は、対象領

域に記号として扱うる単位を切り取り、それを記号として機能させるコードを認め、記号はそこに現前しない何かに関わりうるとする。対象の記号的分節と分節された対象を「模写」する記号システムの分析側での作動、その成果として対象の像の獲得とその像を対象と比較しての真偽判定、ないし、分析の有効性の判定を行うといった一連の手続きが、記号論的挙措の共通項と言えよう。

ところで、普通、記号論の可能性が云々されるとき問題になるのは、記述枠としての特定の記号論の説明能力である。その記号論の根拠となる記号概念が、ある対象領域について記述の妥当性を失った場合、先に述べた記号論の基本的挙措から外れない形でその対象領域を解明する新しい記号概念を創りうるかが、記号論の可能性の問題として現れる。

たとえば、マルチネが提出した言語の二重分節は、言語をモデルとした記号論—実は先に示した記号論の共通する挙措とはほぼ言語モデルの記号論であるが—をあらゆる領域に適用して行くに際して常に躓きの石となる<sup>iii</sup>。実際、絵画記号論の場合、意味を形成するための無意味な記号単位の構成素をどのように確定するのか。要するに、言語記号を範型とした記号モデルは、絵画をはじめ、イメージに関わる記号分析の手引きにはなりえないのではないか、という形で、記号論の可能性が問題になる。

我々が記号論の可能性を問題にするという場合、単に応用の水準で問題を立てているのではなく、むしろ応用の行き詰まりが記号論そのものへの疑念を産んでしまうような地点、そういう地点から問題を立てたい。つまり、上に粗描した記号的営為に共通した挙措そのものの根拠

を問うということが我々の問題である。既に、触れておいたように、我々が共通した記号論的挙措と認定するものの源は、言語記号に関する知見を記号論の範型として利用してきた事実にある。それ故、記号論の可能性という問題は、まず、モデルとされた言語、ないし、言語モデルの記号論の徹底した考察を要する。

## 1.2. 言語をモデルとした記号論

言語の分析は、言語学の歴史が示すように、書かれた言語、つまり、文字テキストを基盤にして始まった。そして言語を巡る言語学的次元の研究におけるもっとも普通の思索の構図は次のようなものである。

まず、文字は音声言語を写しているとされる。ただし、音声言語は音として個別的であり、文字も視覚的に存在するものとしては個別的であるから、非物体的な文字が非物体的な音を写しているとしてよい。そして、この個別的な文字テキストを使って、非物体的音と同型的な非物体的文字をさらにメタ記号によって記述して、非物体的音としての言語本体の統語論的分析を行う。この形式的分析に、概念としての意義 (Sinn) を充填して、次に意味 (Bedeutung) としての世界との関わりを記述する。以上のような構図が言語の分析・研究のおおまかな在り方である。そして、言語の研究は、構造言語学等に認められるように、統語論的分析に関して、文字言語の分析に発したメタ記号による研究において著しい成果を収めたとされる。このような成果は、よく言われてきたように、他の人文諸科学に大きな刺激を与え、言語学が人文科学の寵児になるに及んで、言語学で成果を収めたメタ記号による分析が、他の人文科学の領域へと拡大適用されることになった。

メタ記号を用いる言語の分析の強力な成果、つまり、表層では見えにくい不可視の構造の解明は、他の領域での記号を用いた分析を活性化させ、いわゆる構造主義を産む原因の一つとなった。ところが、他領域を活性化させる過程で、言語と同一の構造が他の領域にも存在するとする姿勢が無反省に生まれた。勿論、こうした錯誤もやがて消滅するが、少なくとも記号によって対象を記述し、その記述を通して言語学が獲得したものと同様の不

可視の構造に達しうる、あるいは、少なくとも対象に関する新しい知見を手に入れることができるという期待感、今日の記号論にまで漠然とした形で持続していると思われる。我々は、この期待感の根拠をこそ問題としたい。

## 1.3. 言語学の本質

我々は、記号論に対する期待感の支えである、そして、記号論のモデルとしての地位の裏にある言語学の成功の実態を考察する必要がある。

言語学はそれ自身の内に問われざるさまざまな前提を孕んでいる。言語学は、我々に対して言語が対象として現れてくることを前提している。我々が聞き、読めるということは、音の現れと文字の現れを前提としており、これらとの相関で聴取能力や読解能力の存在が主張される。これらの能力に加えて通常の言語学的発想には、更に、発話能力、言語運用能力が存在するという前提が含まれており、最終的に言語学は、音や言語そのものの現れは別として、他の前提の総体をその解明の対象とする。そして、この解明の作業で言語学が最終的に依拠するのは、我々に対象として現れるところの発話ないし書記の資料である。要するに、究極的に言語学は、音の現れと文字の現れを全く疑うことのない自明の前提とするところから成立しているのである。この二者の内、音の現れが文字よりも優先するものであると考えられている。音の現れが言語学的研究の根本前提なのである。それ故、言語学の成果の基盤の究明は、音が我々にとって対象として現れる事態の考察によって始まらなければならない。

### 1.3.1 音の現れの構造

我々の日常生活は、聴力に障害のない限り言語音に溢れている。言語自体が音一般の一部を構成することから、我々は常に音の世界のただ中に暮らしていると言える。この音の現れをその源にまで遡って捉えるためには、音の世界に対して外の位置を占めなければならない<sup>iv)</sup>。科学的な音の研究は、音の外に立ち得ているように見えるが、実際には、音の現れを既に前提して音の対象化を行っているに過ぎない。このような挙措は言語学と共通す

るものである。ここでもまた、音が既に対象として立ち現れている事そのものの根底に向けての問いが欠けている。それでは、一体、我々に対する音の現れを、それぞれのもとして捉える方法があるのであろうか。

我々が目指しているのは、〈音—人間〉の関連の外に端的に位置することである。この二肢図式の「人間」は、他ならぬ我々自身であり、そうでなければ音の現れの直接性が失われてしまう。我々自身に対する音の現れの外へと、我々自身が端的に立ちうるということが理想である。このようにして、〈音—人間〉の図式は {〈音—人間〉=我々} と書き換えられる。我々は先に挙げた二肢図式の二項を媒介する〈—〉の根底を問わんとし、三肢図式を導入したが、この際新たに〈=〉という媒介を導入せざるをえない。当然、ここでも媒介〈=〉の根底への問いが引き起こされる。結局我々は、音が現れる現場から無限に背進するというアポリアに捕らえられてしまう。

このアポリアの源には、音と人間を独立に存在するものとして、両者を二次的に関係付けようとする志向が隠れている。音と人間に対する一種の存在論的予断が働いているのである。ただ、我々としては、予断であるからといって、それを簡単に臆見として排斥する方向には組みたくない。果たして予断のなき純粋の音と出会えるのか<sup>3</sup>。

予断なるものを端的に捨て去ることが可能かどうかという問題を考えてみよう。果たして我々が全く予断を含めぬ地点に立ちうるのか。この歴史から超然としたイデア的な地点は、フッサールが『厳密な学としての哲学』で目指したものであった。この地点への到達は、現象学的企図のエレメントである。そして、これこそデリダが『声と現象』において徹底的に論究・批判したものである。我々はここでフッサールとデリダの問題に立ち入る余裕はないが、これを離れても、先の二肢図式との関連の下で、問題の予断を含めぬ点が存在するのかどうかについて考えてみることは可能であろう。

二肢図式に対する批判は既に示唆したように、図式中の各項を独立に存在するものとしたことにある。図式中の各項を「もの」として見てしまう予断は、音の我々に対する現れを一つの方向に解釈してしまうことである。

すなわち、予断の遂行は、音の我々への現れを前提として、この現れた音を巡る様々な解釈が、音の現れに的中するか否かという一致の真理観を確実に誘い出す。そして、結局のところこの一致の議論そのものが成立する地盤への間は等閑に付されるのである。

また、さまざまな理論はまさしく理論的言説であるから、その理論構築そのものが、確実に言語によって支えられていなければならないし、更に、理論構築の営為はある種の論理を前提せざるをえない。このような前提に支えられて仕上げられた理説は、再び自明の前提である音の現れと比較され一致不一致が検討されるのである。

以上のように、我々が問題としている予断は、音の現れそのものの根底への問いを怠って、ある存在論的立場を、一挙に前提という資格から自明の真理へと飛躍させ、その上でさまざまな理論の発生源となっている。また、予断の遂行を実質的に含意する理論的営為はすべて言語と論理の前提の上に成立している。我々が予断なき地点へと進むためには、以上論究してきた範型的予断に付随するさまざまな前提を排した地点に辿りつけるかどうかを検討されなければならない。

しかしながら、音そのものを問うという我々の問いが、実は既に、問うことそのものにおいて言語的な支えに依存している。これをも排除することは、そもそも、予断なき音の現れの現場の存否といった問いそのものの登場すらを不可能にしてしまう。少なくとも論究の開始にあたって言語の前提を廃棄することは不可能である<sup>4</sup>。そして、問いの成立を経て言語を還元し尽くし、有体的言語の棄却された地点に仮に辿り着けたとしても、我々は最早問いそのものが不明となった暗黒の中を漂うだけである。

さらに、我々が問題にしている音の現れの場合、いつも既に我々が音の現れを認めていることが起点としてなければ、そもそも問いかけるべきものが欠けてしまう。すなわち、「音」の意味するところが了解されていなければならない。音の現れの認知と「音」をそのシステムに組み込んだ言語とその了解が前提されているのである。そして、常に言語的な了解が絡みついてくるところにおいては、歴史的な「音」の理解の内容が、つまり、日本

語の「音」という語が取り集めている諸々の歴史的な制約下にある「音」の理解が常に作動してしまうのである。この意味においても、いわば時間を超越した音の現場への到達は不可能であろう。

とにかく、仮にここまで考察してきた諸々の前提、予断を一切排除することができたとしても、ただ一つ、問いかねられるべきものが我々にそれとして知られていることを排除することはできない。我々の目指す地点が、音ならざる、その現れの根底である以上、それが音の現れの根底であることを認めるためには音の現れを音の現れと認めなければ、仮に音の現れに辿り着けたとしても、根底がそれとして認知しえないはずである。我々の目指す事態が、我々の音に対する予め所持する了解を排除し、加えて、言語的、論理的な前提を排除して、全く初源的な音の現れとの出会いであるとする、音の根底に立ち得たとしても、音への先了解を排除してしまっている我々にとって、音との遭遇は起こり得ない。結局、我々は、音の現れに対する先了解の背後へと立ち戻ることはできない。背後に回りえたとしても、そこでは我々は音を知らない。音は問題とはなり得ない。我々は、音の現れへのある了解から出発する他ない。諸々の音に対する理論が自己の出発点としているものも、この先了解を組み込んだ音の根底と音の現れ、並びに、言語的、論理的な前提に由来している。

我々が先了解の生起をそれそのものとして捉えることが不可能であり、無意味である以上、我々の取るべき途は、あくまでも先了解の次元に留まって行くことである。この踏み留まりによって、諸々の理論がもたらす音の記述を通じて、それらが先了解に支持されている限りにおいて、その言説の含意する全方位を辿ることで、音の現れのその都度の先了解の根本構造を明るみへともたらし示すことに努めるほかないのである。

以上の論究の結果として、我々は既存の音に対する諸理論、実証的成果をも含めた諸言説を手引きとして思索する根拠を手中にしたことになる。これらのものは、その予断的構造を隠したままで受け容れられるのではなく、この予断そのものを承知の上で、音に対する先了解の構造を露呈するための営為の手段として、また場として活

用されるのである。

### 1.3.2 言語の本質へ (1) 言語音の考察から

日常生活での音の現れ一般の中にあつて、言語音は我々に対して極めて明瞭に現れる。この際、根本的前提は、我々日本人が日本語を聴取するということである。実際、地球の幾千と存在する異なった言語が、母語たる日本語と同様に我々に明瞭に聴取されるのであろうか<sup>vii</sup>。周知のように、我々は外国語の聴取に際して、完全な聞き分けが通常できない。外国語に対しても我々は母語の音韻体系を聴取の枠組みとして用いると考えられる。その結果、異なる音韻組織をもつ外国語で有効に機能している音韻対立などを聞き損なうといったことが生ずる。ただ、母語の弁別可能性に制限されているとはいえ、母語の前提なくして他の言語を言語と認め、不完全ながらも、その音を聞き分けることはできない。少なくとも言語音とそれ以外の音との差別は認知されえない。それゆえ、我々は母語の我々における在り方を考究する必要がある。

通常、人は言語を獲得すると言われる。そして、現に言語の獲得、とりわけ幼児の言語の獲得をめぐるさまざまな研究がなされている。しかし、このような言語の客体化は、前節の音に関するものと同様の難点を持つ。つまり、我々は言語の獲得の以前へ、あるいは、背後へ回りうるという錯視である。音に関すると同様、我々は言語の背後へは回れない。

幼児の言語獲得のメカニズムの研究は、なお言語の背後へ回る可能性を示唆するかに思えるが、この研究自体が、既に母語と一定の既存の言語観に導かれている限り、言語の背後へは回れない。そこで我々は前節における結論を想起しよう。我々は既存する実証的な成果を徹底的に利用することによって、我々における母語＝言語の在り方をあぶり出し、示すのである。

まず、我々が第一に立ち向かうべきものとして浮上してくるのは、母語における言語音の問題である。通常、言語音の問題は、音韻体系の問題として考えられている。これを考究する手がかりとしては電気音響学的に、発話を視覚化するヴィジュアル・スピーチについて考えてみたい<sup>viii</sup>。

ヴィジュアル・スピーチにおいては、電氣的な処理によって、音の持続と周波数、並びに強度が視覚化されている。母音に対してこの装置を適用すると、母音がそれに含まれる二つの周波数成分—通常第1フォルマントと第2フォルマントと呼ばれる—によって、区分されることも分かっている。ところが、これらの電氣的発話の記録では、我々の言語音の分節感とは異なり、各音の切れ目は予想されるように明示的ではない。記録されたものにどの音が対応するかを確かに指摘できるわけであるが、それは、常に、聴取における明瞭な分節を尺度としてのことである。ただ単に、記録紙の多様な痕跡をいくら辿っても分節を明示化することはできない。その結果、分節的聴取の根拠を聞き手の側に求める考えが生まれてくる。我々は聞き手が言語音を聴取する現場の把握へと押しも戻される。しかし、既に繰り返しているように、我々は聴取という事態そのものを外から考究することはできない。あくまでも、既存の実証的・理論的成果に従って思索する他ない。そこで、言語音聴取の枠組みと目される音韻体系についての知見がそもそも何を我々に示しているのかを問い詰める途を進もう。

音韻体系の示していることがらをドイツ語の母音の音韻体系を参照しつつ考えてみる。ドイツ語では、/a/と/a:/の対立は単語の弁別にあたって有効に機能している。この事態の意味を明らかにするために、仮に、/a/と/a:/の対立を一切有効に用いないX語を想定してみる。X語の話者Mには、/a/と/a:/は全く一つの/A/としか聞こえないはずである。

さて、ここにリンゴが2個あるとしよう。このリンゴはドイツ人にも、X語の話者Mにも、適当な角度から見れば二つのリンゴ、あるいは少なくとも二つの果実として間違いなく認知されるとしてよい。そして、仮にこの二つのリンゴの一つをその場から取り除いたとしてみよう。この場合、後に残ったリンゴは、両者にはっきりと一つのリンゴと見えるはずである。取り除いたリンゴが残ったリンゴを消滅させたり、あるいは、一つを二つに増やしたりすることはありえない。それゆえ、二つのリンゴは互いに無関係であるとしてよい。では、音韻の場合はどうであろうか。

X語の話者Mにとっては、/A/が一つのものであり、また、ドイツ人にとっては、/a/と/a:/は別ものである。それぞれの話し手が、自ら認知するものを「もの」として扱った場合、直ちに分かることだが、リンゴの在り方と言語音の分節聴取されたものとの在り方は根本的に異なっている。実際、ドイツ人にとっては、/a/と/a:/が交互に発音されるたびに、/a/と/a:/が二つの音として認知されるが、Mにとっては、常に一つの/A/しか認知できない。また、/a/発音されてもMには/A/が常に確固として存在していると見える。

要するに、/a/と/a:/の関係は個物の並存ではなく、両者は音韻システムという事態の中での個物であり、対象として浮上するのである。/a/と/a:/は、『論理哲学論考』(1925年)でのウイットゲンシュタイン言い方を借りれば内的関係の内にあるのである(4.122, 4.1252)<sup>ix</sup>。これは関数的関係と言い直してもよい。一般に、音韻体系の各項は図表化されてしまうと実体的錯視に捕えられてしまいがちである。音韻弁別の関数性が空間的対立に移されて、本来の内的関係が見えにくくなるが、言語音の弁別は関数性の中で成立しているのである。

このような関数性こそ、ソシュールが『講義録』で語っている差異の体系の本質である。以下、我々は、ソシュールの体系的差異の体系、我々の言い方では関数性が、言語の本質を示して行く上でどれほどの意義を担うものであるかを明らかにしていこう<sup>x</sup>。

確かに我々は、明瞭な分節音を聞いているわけだが、それは実体的なものではなく、常に他の音を前提している限りで、ある意味において、我々は一つの音の聴取において他の音をも聞いていることになる。この次元の言語音の差異の体系は、いわゆる二次分節のレベルにおける関数的体系性である。そして、この二次分節の関数性は当然のことながら、一次分節の次元へと拡張される。すなわち単語は根本的に単独には存在しえないことである。ある単語には常に他の単語が前提されており、単語は、二次分節の場合と同様にいわば関数的に生起するのである。

我々は、単語をめぐる議論を更に拡大して文について

も同様の事態を指摘しうる。すなわち、文は常に他の文を予想せずには存在しえないということである。このようにして、言語音の分節的対象性を支える関数性が、言語全体を貫いているのである。

言語音に関する考察によって、我々は言語のもつ関数性を導出できたのであるが、この関数性の呈示に際して、暗黙の内に基底としての音韻システムから語へ、そして文へと上昇して行くような身振りを取った。しかし、そのような通常言語学が採用している階層性のヒエラルキーを認めるべきか否かは問われねばならない。我々は意味の問題に突き当たる。

我々が言語の音連鎖を形態素といったなんらかの意味単位に分割することは、音そのものから帰結しようのないことである。言語学のフィールド・ワークにおいて音素的弁別のどの様なシステムが作動しているのかを決定する場合、何らかの意味によって分節された単位に依拠せざるをえない。実際、我々が画然と意味単位を弁別しつつ聞いている音連鎖は、その言語の「外」の聴者にとって言語音の一種として認知しえたとしても、あくまで連続的で切れ目のないものとし映らない。意味単位としての語の弁別が、音韻システム判定の鍵を握っている。それゆえ、我々は言語の持つ関数性が、極めて双方向的に言語のいわゆる各階層を貫いて作用しているということ認めなければならない。

我々は、関数性に貫かれた存在としての言語の像を呈示しえたが、次に、問題となるのは、既に触れておいた言語理解の構図における言語と他のものとの関わりである。この関係についての考察を抜きにしては、やはり我々は言語学の成果の根底である言語の本質を解明することはできない。そして、意味の問題は、言語の意味の理解者として我々をも論究の場へと召喚せずにはおかない。

### 1.3.3 言語の本質へ(2) 一意味の考察一

我々は言語の意味作用について考察するにあたって、一つの手引きとしてウイットゲンシュタインの『論理哲学論考』を用いることにする。『論考』における意味論は、一見したところでは、今日既に常識化した意味論の構図と同一であるように思われる。そこで、『論考』の内容を

見て行く前に、今日、なお、基本的なところでさまざまな言語研究の前提となっている意味論の核心を概観しておこう。

物理音の背後に想定される非物体的な音からなる音列がある。この音列は別の意味の世界と対応している。この意味の世界で対応しているものは、一般的な性質を持ち、これが実在界の個別的に対応するものへと届くとされるのである。極めて単純に図式化すると、以下のような図が描き出せる。

- (I) 物理音の音列
- (II) 非物理音の音列
- (III) 一般的な音列の意味
- (IV) 具体的な実在界における対応するもの

ここで、(I)と(IV)が実在的であり、(II)と(III)は非物体的で、通常個人を越えて抽象的なものとされる。このような区別立てを基底とする区別立てのヴァリエーションはおくとして、とにかく、この構図が示す普及した意味理解の挙措は、(II)の音列と(III)の意味世界を(I)の物理音と(IV)の実在界から区別立てをする点にその核心があると言える。ただし、日常的な意味理解は、(I)と(II)の区別立てを実質的に含意しながらも、曖昧にしているため、意味の世界を非物体的な世界として際立たせることになる。通常言語研究も、言語音の分析に意味が不可欠であることを認めてつつも、常になお、この区別立てが有効なものであるとして遂行されているのである。

我々が問題にしようとしている区別立てはソシュールの言ひ方に直せば、意味するもの(II)と、意味されるもの(III)の区別立てである。この区別立てが必然的に喚起する問題は、いかにしてこの両者が関わりうるのかというものである。すなわち、記号の意味作用の根拠は何か、ということが問われざるをえない。

我々の当面する課題は言語における意味作用の根拠付けであるが、この「意味作用」という言語に対して用いている用語をそのまま拡大適用することの危険性を意識しつつ拡大適用するならば、言語の意味作用の根拠付け

は、要するに、先に言及した区別立てにおける、物理的世界に所属するものが、非物理的な意味を喚起することの根拠付けに結び付いている。後者の問題は、世界の記号性とでも呼べる事態を問うことであるが、我々はこれを考察する前段階に、言語の意味作用の根拠付けの問いを位置づけることができよう。

言語における意味作用の比較的流布している根拠付けをまず検討しておこう。

意味するものと意味されるものが連想作用によって結合するという主張は、根拠付けを解明しうるのであるか。この議論は、意味するものと、意味されるものが分離された上で、結合の媒介として両項の有限回の共起が結合を成就するという構造をもつ。意味されるものは、既に前節の議論から明らかのように、孤立的ではありえず、「もの」的な在り方をしていない。したがって、意味するものの分離はその関数的全体を前提しており、これはとりも直さず既に言語を前提している。言語を前提する限りで、言語の可能性の核心である意味作用の理解を前提しており、言語のいわば外を問うことである意味作用の根拠付けは、連想作用において説明することは不可能である。一見、意味するものと、意味されるものの自然的な連合という外観を呈するが、約定による意味するものと意味されるものの結合という議論と同根のものである。

約定による意味作用の説明は、既に、約定遂行のために言語を前提する。そして、約定の必然的な公共性よりすれば、そこで前提される言語は公共的である他ない。なお、それでも個的レベルでの閉塞的約定を強弁するにしても、この約定者は、単に実在的リングを意味するものとしての「リング」と約定することは不可能である。すなわち、二重分節から、シンタックスに及ぶ実に広範囲な約定作業を強いられることになり、このような約定行為そのものが、意味から切り離された言語が、意味を表すことを既に知っていなければ不可能であり、作業の出発点で言語の意味作用がやはり前提されてしまっているのである。

このように、意味するものから意味されるものを分離して結合しようとする挙措は、意味作用の根拠付けに届くのであろうか。『論考』における意味作用の根拠付けも、

その外観においては、分離—結合の挙措を取るものであるが、この方途を徹底化させることによって新たな視野を開いたと思われるのである。

### 1.3.3.1 『論考』における意味作用の根拠付け

ウイットゲンシュタインは、端的に、命題 (Satz)、並びに可能態としての論理空間に所属する事態 (Sachverhalt) と、その現実態としての事実 (Tatsache) の三者が論理形式 (die logische Form) を共有すると答える<sup>xi</sup>。この三者が、仮に、論理形式を共有するにしても、この共有を認知する媒介的存在が不可欠である。この媒介者は我々であって、我々は、まず、実在界に所属する命題記号 (Satzzeichen) を形成することによって、事実の論理像 (das logische Bild) である思想 (Gedanke) を形成する。ここで注意すべきことは、「事実の論理像が思想である」(3) とされるとき、論理像自体の形成という行為が無視されているかに見えるが、成果としての論理像は、常に思惟するという行為の成果であることを『論考』は明確に意識している。これはまた、命題記号とう静態的なものが、意義であるところの事態と並置されているのではなく、記号の使用という行為を介して (3.326, 3.328)、意義が記号に現出するとされていることと同一のことがらである。すなわち、我々は論理形式を共有するとする三者を眺め渡す地点を確保して、論理形式そのものを現前させ比較するのではない。もしそれが可能であれば、我々は意味作用の外に端的に立ち得たことになるからである。そして、この外を『論考』自体は否定する。それでは、我々はどうのようにして論理形式の存在という事態に辿り着けるのか。

この問題の解明のために、我々は『論考』における先の三者、命題、事態、事実の各々に関する『論考』の叙述を検討しなければならない。

『論考』における命題は、命題記号であり、記号は事実には属している (3.12)。事実としての命題記号は、また決して日常言語を基盤に再構成された記号言語ではなく、あくまで日常言語であり、『論考』は理想言語を認めない(4.121)。このような命題記号は、意義<sup>xii</sup>の表現 (ein Ausdruck) であり (3.3)、シンボル (Symbol) (3.32) <sup>xiii</sup>であるとされ

ている。ここでも、「表現スル」という行為と「シンボライズ」という行為がその成果である表現、シンボルに内属していることに注意しなければならない。

実際、次の主張を我々はどのように解するのか。「二つの別なシンボルが、同じ記号（文字記号・音声記号・その他）を共有することもできる」（3.321）と言われる。命題記号は、名（Name）によって構成されており（3.202）、名と残余の部分との内的関係において命題となる（3.14, 3.13）。したがって、命題記号において名が構造化される時、その構造化の差異に対応して、名は、異なった意味作用を担う。異なった意義が、すなわち、論理空間におけるしかじかの異なった事態が、命題記号において現出するのである。命題記号全体が、表現、すなわち、シンボルであるとされていることとこれは符号している。また、命題記号全体がシンボルであるということは、命題記号自体が多義であるということに他ならない。それゆえ、命題記号はそのシンボル行為においてはじめて意義を現出することになり、孤立的に命題記号が意義を現出させるのではなく、命題記号を包み込む、いわばコンテキストが不可欠な意義の現出の条件となる。これは既に要素命題（Elementarsatz）が一義的に論理空間の事態を現出させる（4.211, 2.061, 2.062）という静態的な見方を否定すると同時に、理想言語そのものがそれ自身常にコンテキストを離れて一義的に意義を現出させるために無限のコンテキストを予め枚挙し、何らかの仕方理想言語にそれを組み込むという条件を課せられることで事実上不成立になることを導出する。このように、命題記号の側がコンテキストの問題を引き込まざるをえず、コンテキストの広大さから予想せざる多義性を含み込んでしまうとき、そこに現出する論理空間の事態は全く孤絶して存在しうるのである。理想言語の構築とは、孤絶せる意義が確保されていることによって常に喚起される活動でもある。この問題に関して、我々は、『論考』における次の洞察を真剣に受け止めねばならない。

「記号とは、シンボルにおける（am Symbol）感性的に知覚可能なものである。」（3.32）（傍点、イタリックは筆者）

行為を内属する成果としてのシンボルは、感性的側面を自ら内属せしめているのである。表出作用、ないし、シンボライズにおいてしか、意義が命題記号に現れないのであるから、意義の命題記号から孤絶した在り方は否定されざるをえない。したがって、命題記号は、単にそれを経由（durch）して、それとは孤絶した意義を表すのではない。それ故、『論考』は、命題は意義を「示す」とするのである（4.022）。そして、命題がコンテキストを含意して初めて意義を現出する以上、この命題に呼応する意義、事態が、『論考』の要請するように相互に孤立して存在することはありえない。

『論考』は語りうるものを言語の内側から境界画定するというテロスに導かれている。このために、命題が事態に一義的に的中することが要請される。我々は命題の一義性が崩壊することによって、今また、残りの半面に疑いをかけている。ところで、この一義性の確保は、端的に次ぎのような要請の形を取るのである。すなわち、「命題の可能性は記号による対象の代表の原理（Prinzip der Vertretung von Gegenständen durch Zeichen）に基づく。」（4.0312）（傍点、イタリックは筆者）この原理は既に否定した命題の孤立的在り方と、命題が現出する事態の孤立的在り方によって保障される。事態の孤立的な在り方、つまり、事態の論理空間において相互に依存することなく在りうるのは、事態の要素である対象が実体（Substanz）であり（2.021）、その限りで相互に孤立していることに由来している。先の『論考』の主張は、この実体＝対象に関しては、現出という形で名が関わるのではなく、名を経由して（durch）対象へ我々は届くと述べている。しかし、既に述べたように、命題に事態は現出する（＝示す）のであって、命題を離れてそれが成立しない以上、名についても、「代表の原理」は否定され、名において対象は現出するとしなければならない。意義が感性的命題とその関与性なしに存在しえない以上、当然、対象も感性的名なくしてはありえないとしなければならない。したがって、対象の実体性は否定されざるを得ない *viv*。



また、命題記号がコンテクストの中で、命題域とでも名付けるべき境界をもつと考えた場合、あるいは、ウィットゲンシュタインの要素命題という境界をそのまま認めたにしても、結局、この境界が、対象の構造化された事態を要請したと考えることができよう。実体が原理的に孤立させるものであり、その組み換えのみがあるとするれば、その組み換えに事態の境界を画定する必然的枠は帰属しないからである。この困難を洞察したウィットゲンシュタインは、対象としての実体は、それ自体、常に命題記号における名が命題記号の内に内的関係において帰属する限り名であるとの主張と相同的に、事態の内にしかないことを主張するとともに、実体にはそれが組み込まれるべき事態が予め可能的に刻印されているとしたのである(2.0121, 2.0122)。しかし、事態を予想し、それを不可欠の性質規定とすることは、実体が既に相対的に独立性をしかもたないことに他ならない。『論考』のプログラムは、『論考』自体によって破壊されたのである。

以上の帰結をまとめるならば、『論考』における実用論的と呼べる洞察は、命題記号と意義の端的な分離を認めない。したがって、論理的空間の存在は否定される。この結果、我々が当初問題とした「論理形式」は、どのようになるのか。「論理形式」は、意義が命題へと現出するための可能性の根拠とされている。すなわち、それは命題と事態に形式の枠をはめる超越論的機能を担い、一致の真理の基盤である。しかし、論理空間の消滅は「論理形式」を不要とする。消滅したものを支持するとされたものは不要となるのである。また、事態の存立として規定され、命題記号を経由して指示される、つまり、「語りうる」とされた事実の総体からなる世界は、このような規定を解除されることによって、端的に在る、謎としての世界となる。「世界がいかに在るか、ではなく、それがあることが、神秘的なのである。」(6.44)

世界は『論考』の「示す」と連関する「語る」という意味では、語りえぬものとなるが、我々が世界の一部である命題を形成することで世界について思惟すること、「語る」という形が否定されても世界が命題を包括する像と関わることそのものが否定されたのではない(4.115)。『論考』が認めるように、我々には、形像能力があり、日常言語を語る力がある<sup>39</sup>。ただ、命題記号の事実性は、

前節における言語音の外への踏み出しの否定を受けて、我々が言語の外へ踏み出しえないことを、従って、実用論的場に引き出された意味作用の外へ踏み出しえないことを認めなければならない。

### 1.3.4 言語ゲーム

『論考』の議論に対する自己批判が後期ウィットゲンシュタインの思索の一つの課題であることは周知のことがらであるが、その自己批判は、『論考』で展開された議論の全面的否定ではない。『論考』後のウィットゲンシュタインは、『論考』における非実用論的言説を徹底的に批判する。その際、時としてそれ以外の実用論的洞察までもを否定しているという印象を我々に与える。ウィットゲンシュタイン自身も自らの言説を誤解する傾向があり、このような自らのテキストに対する誤解が、いわゆる後期ウィットゲンシュタインの思索を支える力になったということも否認しない。しかし、この誤解が生み出した成果自体は、あくまで『論考』におけるラディカルな議論の発展的継承なのである。

『論考』における決定的議論は、各命題の意義が一つの論理空間を形成し、そこで一義的に確定されるというプログラムの否定である。そして、この命題において内的関係の下で布置される各々の名(Name)は実用論的空間において、従って時間的に規定された実用論的場において規定されるということである。その際、一つの名は、唯一の実用論的空間に帰属するのではなく、複数の空間の交錯点でありうる。そして、一つの名は、当然、他の名を予想するから、複数の名が、その空間に布置されることになる。名そのものは関数性によって見渡し難い場の中に位置するが、この無数の名は、一定の独立した実用論的空間に統合され、複数の実用論的空間からなる関数的に入り組んだ、いわば、コスモスを形成するのである。ウィットゲンシュタインは、この様な空間を言語ゲーム(Sprachspiel)と呼ぶ。かくして常に一つ一つの名について交錯する言語ゲームが全体として見渡し難い網状組織を形成し、この組織そのものは歴史的に変動して行く。ただ、我々はこの組織の外に立ち得ないのであるから、組織の単位としての言語ゲームの布置を対象化し

えないし、それぞれのゲームの命運を見渡すことや、外部的根拠付けとしてのゲーム間の因果関係などを議論しえない。このコスモスは、常に突発性を孕んでいるのである。

ところで、言語自体は一体どのように把握されるべきなのか。あらゆる言語ゲームを規定する、ある意味でサピア・ウオーフ的な、形式的枠組みなのか。

例えば、英語の *but* の意味作用を考えてみよう。*but* は、端的に『論考』的意義を欠いている。また、『論考』における論理的定項の中にも加えられない。*but* は、『論考』の枠組みでは有意義性の基準から意味作用の外に放逐されるが、にもかかわらず日常言語の理解可能性によってその意味作用が回復されるという矛盾に曝されている。しかし、言語ゲーム論の観点に立てば、*but* はその使用においてのみ意味を獲得する。勿論、この場合、言語は前提されている。しかし、言語ゲームにおいて一つの語が意味作用を獲得する場合、前提されている言語のいわゆる文法の学習が前提されているのではない。実際、幼児が *but* の使用を習得するのは、複雑な文法の学習によるのではない。あくまで具体的な使用の中で習得する。しかし、一方で *but* が、英語という言語を前提するものであるとしたら、幼児の *but* の習得という事態をどのように考えればいいのかであろうか。

言語自体の習得を巡る範型的議論として直示定義による語の獲得の議論がある。*This is A* という形で、直示定義を総括するならば、通常、*This is A* によって物や事の名が習得されるというわけである。しかし、*This is A* が物や事の名を与えること、つまり、そもそも物や事が名を担うということ自体が予め習得されていなければ、この *This is A* は有効に機能しない。ウィットゲンシュタインがアウグスチヌスの一節をひいて議論して見せたように、*This is A* ということの習得は極めて小規模な形であれ、言語の世界に入ったということである<sup>xvi</sup>。この言語への参入は、言語の本質といったものを理解して実現したものではない。言語への参入ということ基礎付けること自体は、既に述べたように、それ自体見渡し難い事実であるため不可能である。とにかく、幼児の言語習得は、一つの語をめぐる言語ゲームの習得であるとともに

に、ある形での言語の習得、極めて断片的な習得なのである。幼児の言語習得の研究が、いかなる語の獲得を言語への参入への端緒とするにしろ、意味作用が発動した時点で、幼児は、関数的な言語世界、言語ゲームの網状組織に参入し、それを次々に習得するとともに、新たに分節する可能性を獲得するのである。

我々はこのまでの議論において、言語が存在しなければ、言語ゲームが成立しないという語り方をしてきた。しかしながら、『論考』が導入した実用論的空間は、必ずしも言語を前提しなければ成立しないというものではない。幼児は通常、母語の海の中を泳ぐ形で成長するのであるが、このような音声中心主義が挫折する事例がある。実際、正常な幼児の場合ですら、言語習得に立ち入る前に、既に意味作用の世界に加わっていくという事例である。幼児は、言語習得の以前においても、母親の動作を理解して行動し、また、自らの行動が母親たちの実用論的空間に収容されることによって、その実用論的空間を自己のものとして行くのである。そして、この実用論的空間は、例えば、スプーンの使用ということにもあてはまる。食そのものが文化であることが自明であるとするれば、まさしく食事の道具としてのスプーンもその一部であり、スプーンの使用の習得は、一つの大きな実用論的空間への参入を可能性として含意する小さな実用論的空間の習得ということになる。スプーンは、この空間への参入によって不思議な物ではなくなる。

更に、音声中心的議論にとって致命的な事例は、先天聾の児童が絵やジェスチャーを通じて言語ゲームに参入し、遂には、日常言語を習得するという事態である。結局、言語ゲームへの参入は、音声的なものによって導入されなくとも、絵やジェスチャーによっても可能なのである。また、言語ゲームは必ずしも言語を不可欠の前提としているわけではなく、意味作用の成立する場である実用論的空間として言語ゲームを捉える限り、言語による言語ゲームへの収容の可能性をもちつつも、言語から独立した実用論的空間として広義の言語ゲームの空間が存在する。スプーンの例にも認められるように、この意味での言語ゲームこそが、意味作用を生起せしめるのである。したがって、我々は、ここで、記号論の可能性の

問題に答えるであろう。

いかなるものも言語ゲームの内に収容される限りで、意味作用をもつ。このゲーム自体は対象化しえないので、我々は言語ゲームの外からゲームの規則を規定しえず、そのゲームへの理解と内的に深化する他ない。我々が手にしているものは、常に関数性の中の断片であり、言語自体も見渡しきれないために、我々の営む言語ゲームへの理解は、この関数性を辿る形で現出する。したがって、我々の理解の構造そのものが、他なるものへの関わりの中で順次生起する断片的なものであり、記号的なものであることになる。この意味で我々は、根本的に記号的に存在しているのであり、この在り方の解明というゲームを記号論と呼ぶならば、我々は常に記号論を実践しつつあると言える。それでは、本論考でその可能性を問題にしている記号論は、このような意味での記号論とどのような関係にあるのか。

この問題に答えるにあたって、我々には、現代の記号論の範型である言語学の本質という先述した課題に立ち返らなければならない。

### 1.3.5 言語学の本質

「これは音素である」という文が意味作用を持って有効に機能する実用論的空間に我々が参入しているとき、とりあえず我々は、言語学をある形で営んでいると言える。この実用論的空間は、前節の議論よりすれば当然一つの言語ゲームである。そして、この言語ゲームの中で、有効性を持つ先に挙げた命題を関数的に包含し支持する空間の全体は、それを創設する問われざる構え—ウイットゲンシュタインはこれを規則と呼ぶ—によって統御されている。言語そのものの究明の過程で明確になったように、我々には、言語ゲームである言語学の本質というものを、それ自体として端的に把握し、呈示することはできない。つまり、言語学が言語ゲームである限り、それを統御する規則を、そのゲームの外側から包括的に見渡し、指定することはできないのである。しかしながら、例えば、同じ言語を対象にするゲームである文学批評と言語学の差異はゲームに参入している当事者にとっては、ある種自明なものであり、また、何らかの命題が言語学

に所属するか否かも、ある種の明晰さをもって判定しうる。このような状況は、本質論的挙措と通底する現象学的還元などによる超越論的な形での言語学の規定が可能ではないのかという想いに我々を駆り立てる。しかし、言語ゲームは、それを見渡しえないがために、そこに参入している者にとって、ある種の明確さをもってそれを他のゲームから区別できるとしても、全き明解さで捉えきることは不可能である。また、言語ゲームは現実との連関においてのみ成立し、由来を見渡しえない突発性を持った歴史的な営為でもある。要するに、規則を超越論的なものとすることはできない。しかし、一方において、規則が超越論的に機能することも事実として認めなければならない。したがって、この規則こそは、実用論と超越論的なものが接続する場なのである。

ところで、我々は規則について全く語り得ないのか。言語ゲームは全くカオスではありえない。例えば、言語の解明は品詞といった形の単語のカテゴリー化を介して形成された有限のカテゴリー記号によるモデル形成によって可能である、といった言説は、言語ゲーム内にいるという制限と、この言い方の個々の部分が極めて多義性をもつということを含めたとしても、一応、ゲームを動かす規則的言説であると言える。言語学の営みは、こうした規則的言説に従いつつ、また一方で常に違反する可能性を含みつつ展開されているのである。ゲームに参入している者が、規則にとりあえず忠実である限り、このゲームは果てしなく続くが規則そのものを疑問に付するとき、消滅してしまうであろう。また、規則に従うことが、完全に規則を見渡しきれないために、結果的に規則そのものを消滅させることもありうる。しかし、通常、この規則を否定するものは、規則の領界に強引に回収されてしまうのである。

言語学を統御する規則は、19世紀の自然科学的真理観であり、その援用によってまさしく近代言語学は生起したのである。『論考』の有意義な命題が対象との一致の有無によって真偽判定を行う挙措と言語学の構えは共通している。『論考』が主張するように、事実としての像形成能力は認める他ないが、その構造が一致の真理観であるという要請が却下される限りで、言語学は言語にこのよ

うな構えを強制することによって、構えの選択が同時に研究対象を生成するという枠内を動く科学的営為となる。従って、この枠組みによって研究対象を得るとともに、自らの営為を保障された言語学は、この領界内を越えることができない。しかし、一致の真理観に発する熱情が産む言説は、規則の本質的不分明故に、枠組みを否定する豊かな内容を帯びうる。言語ゲームは、常に倒壊の可能性を孕みつつ遂行される。そして、記号論へ転用される言語学に由来する記号モデルは、当然我々の記号性故に有効であるが、何よりもその適用が言語への実用論的理解の内を横断しつつ遂行される分析のもつ現象学的忠実さ故に新鮮な洞察を産む。対象との関わりを喪失した整理の枠組みとしての言語モデルの転用は、整理を越えた対象との親しさを樹立しえない限り、理解の深化よりも、理解の固定化を生成し、貧しく空回りする。この意味で、記号論の言語モデルは、対象理解の期待感に 대응てはくれない。従って、既に議論したように、我々が記号論的在り方をし、その限りで記号論は不可欠であるとしても、各対象領域は、独自の記号論的実践によってしか解明へともたらされえない。(続く)

- i 記号論は、意味生成の成果に重点をおいてシステムとし記号体系を解明することから意味生成そのものを問題とする方向へと展開してきた。しかし、意味生成の問題圏についての考察をよりラディカルに遂行するには、「静態的な記号論」の試みが内包する教をさまざまな角度から吸収することがなお課題として控えている。
- ii 標準的な記号学事典の目次も、記号論の適用領域の広さを示唆している。Winfried Nöth, *Handbook of Semiotics*, Indiana University Press, Bloomington and Indianapolis, 1990.
- iii 言語モデルによる、あるいは、言語モデルに浸透されている、記号論と根本的に異なる源から展開されると思われるパースの「汎記号論」的思考については、本稿では直接扱われない。但し、パースの思考が、論考全体においては、後期ウイットゲンシュタインとの関わりの下で十全に検討されることになる。
- iv 音の問題の考察は、言語音、音楽の音、さらに、それらを含む音そのものの問題圏を含んでいる。音楽の音について、音そのものについていわず存在論的な視座から考察を踏まえて論及するものとして次の著作が重要である。勝道興著『音響のオルガノン—ざわめく波動の存在相へ—』頸草書房、2001.
- v 純粋な視覚に関する以下の批判的論考を参照。Martin Jay, 'Scopic Regimes of Modernity' in *Vision and Visuality*, edited by Hal Foster, Bay Press, Seattle, 1988.

- vi 言語の還元不可能性の認知は、言語の根源性の認知から言語に根源としての絶対的資格を付与する方向へと展開する可能性を孕む。これは、場合によると、「映像」を言語に短絡的に根拠付ける事態を招来する。ハイデガーの言語に関わる思惟は、これに歯止めをかける力を持つが、一方でより強力にこのような短絡的根拠付けを促進してしまう側面をもつ。
- vii 母語という表現を慣例にしたがって用いている。言語習得のより精細な現場の研究と、母語という言葉にまわりつくイデオロギー的な問題はここではとりあえず宙吊りにされている。また、多言語使用の問題も同じ扱いを受けている。
- viii ヴィジュアル・スピーチについては、デヴィッド・クリスタル編『言語学事典』風間喜代三他訳、大修館、1992を参照。
- ix 本稿では、『論理哲学論考』については以下の版を使用する。なお慣例によって、以下の本文では『論考』と略記し、『論考』からの引用も慣例によって明示する。Ludwig Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1977. なお、『論考』の読解にあたっては様々な邦訳と註解書、研究書に依っているが、次の邦訳・註解と研究・註解書に多大なる恩恵を蒙っている。山元一郎訳・註『論理哲学論』、『世界の名著』58 所収、中央公論社、1971、末木剛博著『ウイットゲンシュタイン論理哲学論考の研究 I、II』公論社、1976、1977.
- x ソシユールの、という言い方は、『一般言語学講義』として出版された講義ノートの初版において編者が提示したテキストが引き起こしたソシユール像とでもよべるものを念頭において用いられている。ソシユールがソシユール像と異なる側面を持っていたことが『講義』の鞫晦さに通じている。また、ソシユールの言語観については、彼がドイツ語に堪能であったことと、かれの活動時期からしてエルンスト・マッハの影響というものを勘案する必要があるかもしれない。以上のことについては、以下の書物が重要である。前田英樹注解『ソシユール講義録注解』法政大学ウエニヴェルシスタ叢書345、法政大学出版局、1991、木田元著『マッハとニーチェ』新書館、2001.
- xi 『論考』の基本語を訳すにあたっては、おおむね山元の前掲書に従った。なお、以下を参照。末木、前掲書 II、pp.6-7, pp.41-42.
- xii 末木、前掲書、pp.27-29.
- xiii 山元、前掲書、p.247 註 (6)
- xiv 末木、前掲書、p.27.
- xv 日常言語と詩に関わる問題圏について、比較的新しい論考として以下のものが秀逸である。Marjorie Perloff, *Wittgenstein's Ladder — Poetic Language and the Strangeness of the Ordinary*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1966.
- xvi Ludwig Wittgenstein, *Philosophische Grammatik, Teil I Satz.Sinn des Satzes*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1973, pp.19-20.